国立国語研究所学術情報リポジトリ

文献レビュー10 Papen, Uta (2005) “Adult Literacy as Social Practice: More than Skills”

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 国立国語研究所
	公開日: 2024-06-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 角, 知行
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000272

Papen, Uta (2005)

“Adult Literacy as Social Practice: More than Skills”

Routledge

角　知行

2024 年 7 月 1 日

ここで文献紹介として取りあげるのは、2005 年にラウトレッジ社から刊行された『社会的実践としての成人識字―スキルをこえて(Adult Literacy as Social Practice: More than Skills)』である。ラウトレッジ社のサイト[1]によると、著者パーペンはイギリスのランカスター大学の言語・英語学科教員。ユネスコやナミビアなどで識字調査をおこなった経験があり、識字を主たる専攻分野にしている。本書のほかに『識字とグローバリゼーション(Literacy and Globalization)』、『識字と教育(Literacy and Education)』といった著書がある。共著や論文も多く、現代イギリスで活躍する代表的な識字研究者のひとりであるといってよいであろう。

1980 年代、「先進国」とよばれる国々において、識字調査がおこなわれ、能力に限界のある「機能的非識字者」が一定の割合で存在することが確認された。その問題は多くの関心をよび、政策や教育の必要性が提起された。イギリスでは、調査結果をもとに、成人基礎教育の提案がなされている。

同時期に、識字研究においても、新たな潮流があらわれた。それは「新識字研究(New Literacy Study)」とか、「社会的実践としての識字研究(Literacy Study as Social Practice)」とよばれる。現在も、この観点からする研究は数多く発表されているが、学説史上の流れや研究方法の特徴を解説した書は少ない。本書は、それらをわかりやすくまとめており、この研究動向を鳥瞰するには好適である。

全体はふたつのパートからなる。パート I は「新たな理論的アプローチ」。イギリスを中心に、英語圏の国々で出現した新しいアプローチが紹介される。その特徴は、社会的実践の観点からよみかきを研究することにある。識字研究の流れ、新識字研究の方法的特徴、文脈や権力への視点、方法としてのエスノグラフィーが各章の内容になる。

パート II は「政策と実践への影響」。2001 年、イギリスは成人の言語、識字、計算能力を向上させる政策として、「スキル・フォー・ライフ」を発表した。その内容や背景が記述されるとともに、批判的談話分析を用いて、批判的に考察される。イギリスの成人教育の歴史、現代の政策、その批判、新たな成人教育の提案が各章の内容である。

以下では、順に各章の概要をみていくことにする。パートⅠ・第1章は「識字(literacy)とは何か」。パーペンは識字をめぐるこれまでの研究を 3 つにわける。第 1 は機能的識字研究。たとえばイギリスにおける「スキル・フォー・ライフ」計画は、人材開発、雇用調整といった社会のニーズに沿って個人の読み書き能力をたかめようとするものである。これは識字を技能としてだけ評価する機能的識字観にもとづいている。第 2 はフレイレによる批判的識字研究。識字学習者は自らの社会環境とその中での立場について批判的にとらえることが求められる。その研究の流れは今も続いている。第 3 はリベラルな識字研究。イギリスにおけるリベラルな成人教育の伝統と関連するもので、より学習者に定位した識字教育を目指す。これらのなかで支配的なのは、最初にあげた機能的識字研究である。スキルという観点が識字に関する研究や教育の中核をなしているのである。

第 2 章は「よみかきに関する新しい見方」。新識字研究あるいは社会的実践としての識字研究が取りあげられる。1970 年代、80 年代にスクリブナー&コール、ストリート、バートンなどによって、新しい識字研究の興隆がみられた。彼らに共通する方法は、識字を単なるスキルとしてではなく、社会や文化に組みこまれた社会的実践として理解すること、教育現場や教育上の問題からはなれ、社会の諸場面を研究対象にすることである。そのための中心的な概念は、「よみかき実践(literacy practice)」あるいは「よみかきイベント(literacy event)」である。特定の場所に定位してよみかき実践を記録すること、その背景にあるパターンや社会構造を考察すること、いうなれば言語人類学にも似た方法が実行されるようになった。

第 3 章は「文脈におけるよみかき」と題され、権力の問題をあつかう。これまでのスキルモデルでは、よみかきはもっぱら中立的、個人的なものであった。しかし社会的な文脈を含めるならば、よみかきには権力が介在していることがわかる。ストリートは両者を「自立的モデル」と「イデオロギーモデル」とよんで区別する。教育テストなどで要求される識字は社会から要求される「支配的よみかき」である。この対極は「地域的(local)、自生的(vernacular)よみかき」と名づけられる。非識字者や限界的識字者は単に識字能力に限界のある者とみられるべきではない。彼らはネットワークを通じて仲介者を利用したり、自分のもつ知識やテクノロジーを使ったりして、(代替的に)よみかき活動をおこなっている。識字研究の意義は、こうした地域的、自生的なよみかき実践をあきらかにすることにある。

第 4 章は「日常生活や教室でのよみかき研究のためのエスノグラフィー」。新識字研究は、教室での学習や指導から離れ、日常生活でのよみかき研究へと視点をうつした。日常生活の観察と参加からデータを引きだす際に有効になる研究方法がエスノグラフィーである。この方法はインタビュー、参与観察、文書分析、写真・ビデオといった視覚的記録などによって、人々のよみかき実践をあきらかにしようとする。著者は研究者だけでなく初学者むけという問題意識をもって本書を執筆しており、この章には具体的なエスノグラフィー研究の進め方が例示されていて、参考になる。

つづくパートⅡ・第 5 章は「イギリスの成人教育の歴史」。ここではイギリスの 20 世紀

後半の成人教育の歴史が、3 つの時期にわけてまとめられている。200 万人の非識字者あるいは機能的非識字者が発見された 1970 年代。彼らに対する成人基礎教育の学習プログラムが徐々に形成された 1980～90 年代。そして新自由主義経済に対応すべく、成人の言語、識字、計算能力を向上させる国家戦略「スキル・フォー・ライフ」が策定された 2000 年代。

第 6 章は「イギリスにおける成人の言語、識字、計算能力政策の現状」。2001 年にはじまった「スキル・フォー・ライフ」は現代的な言語、識字、計算能力の向上をめざしたものであり、これまでの成人教育とは一線を画すものである。またこの時期は、「ESOL: English for Speakers of Other Languages(他言語話者のための英語)」の国家カリキュラムが策定された時期でもある。他の先進諸国と同様に、イギリスでも職業上の課題として外国人・移民に、言語、識字、計算能力が要求され、そのためのカリキュラムが形成されるようになった。

第 7 章は「スキル・フォー・ライフ戦略の批判的読解」。この言語政策の基になったのは、OECD が 1994 年から 1998 年にかけて実施した国際成人識字調査(IALS: International Adult Literacy Survey)である。この結果、イギリスでは教育・識字能力と収入の間に関連性があり、個々人の基本的技能の欠如が、生産性の低下や負担の増大を国にもたらしていることが明らかになった。つまり国と個人に対する経済的コストの観点から、識字能力などの向上が唱えられているのである。パーペンは、こうした言説を「職業主義の言説」とよび、その批判的読解を試みている。

第 8 章「成人の言語、識字、計算能力の政策と実践に対する社会的識字論の含意」は、パート I でみた新識字研究の立場からする成人教育への提案である。識字教育はただ人々を生産的で経済的にするのが目的ではない。市民生活、政治、余暇などへのより積極的な参加を保障するものでなければならない。それはカリキュラムをうえから押しつけるものではなく、学習者が自身のニーズにもとづいて参加するものである。新識字研究は、エスノグラフィーという方法によって、日常的なよみかきの実相をあきらかにしてきた。それは学習者のニーズを明らかにし、識字教育の貴重なリソースになるはずである。パーペンは、画一的なカリキュラムではなく個々の学習者のニーズにもとづいた参加型の識字学習を提案する。

本書はこれを結論として筆がおかれている。ただし、実際に識字教育に携わるものからすれば、物足りない感がするであろう。外国人や移民もふくむ限界的識字者にどのような教育プログラムが提供されるべきなのか、具体的な提案はないからである。著者はまた支配的な識字政策に異議をとなえ行動をおこす方法として、「批判的社会実践的アプローチの必要性」を提案する。しかしそれがどのような内容なのかについても記述がない。そういった意味で、実践や行動を重視する立場からは、本書は尻切れトンボの感が否めない。もっとも、それは新識字研究、あるいは読者の私たちに課せられた課題であるともいえる。

この本が出版されてから、すでに 15 年がたつ。新識字研究においては、その後も多彩な

成果がみられる(ローセル・ジェニファー／パール・ケイト 2015、マーティンジョーンズ・マリーン／マーティン・デイドル 2017 などを参照)。日本でも新たな識字研究の展開を期待したい。

注

1)https://www.routledge.com/authors/i12950-uta-papen, (アクセス：2023 年 7 月 25 日)

参考文献

Martin-Jones, Marilyn and Martin, Deidre(ed.) (2017) *Researching Multilingualism: Critical and Ethnographic Perspectives*, Routledge

Papen, Uta (2005) *Adult Literacy as Social Practice: More than Skills,* Routledge

Rowsell, Jennifer and Pahl, Kate (ed.) (2015) *The Routledge Handbook of Literacy Studies,* Routledge

本文献レビューは、国立国語研究共同研究プロジェクト「定住者外国人よみかき研究」の研究成果である。また、本文献レビューの内容に対する責任は本プロジェクトが負う。